横浜トリエンナーレ
YOKOHAMA TRIENNALE

Press release
2022年6月30日

「ヨコハマトリエンナーレ2023」アーティスティック・ディレクター リウ・ディン（刘鼎）とキャロル・インホワ・ルー（盧迎華）に決定

横浜トリエンナーレ組織委員会（委員長：近藤誠一［公益財団法人横浜市芸術文化振興財団　理事長］）は、第８回となる「ヨコハマトリエンナーレ2023」のアーティスティック・ディレクター（以下、AD）を、リウ・ディンとキャロル・インホワ・ルーの二人組に決定しました。本展をもってリニューアルオープンする横浜美術館と、プロット48を会場に、初めて冬の時期に開催します。

リウ・ディンとキャロル・インホワ・ルーは、アーティスト（リウ）と美術史家（ルー）の二人組です。2007年より共同キュレーションを開始し、北京を拠点に、ヴェネチア、光州、イスタンブール、釜山など、世界の国際展で活躍しています。
変化の激しいこの時代にあって、二人は、時に個人の小さな営みに目を向け、また時に歴史の転換点を振り返って、そこに今日を生きるための知恵を見出します。東洋の思想からグローバル化が加速する21世紀の暮らしまで、時代や地域を超えて、二人はアイデアを探し求めます。
横浜トリエンナーレは前回、初めて海外からADを迎えました。わたしたちはいま、コロナ禍や戦争によって、世界が否応なくひとつながりであることを実感しています。第８回となる今回も、前回に引き続き海外よりADを迎え、国際的に活躍するお二人と共に、人と文化が行き交う港町ならではの、世界へと開かれたトリエンナーレを目指します。

「ヨコハマトリエンナーレ2023」
アーティスティック・ディレクター
右：**リウ・ディン**
左：**キャロル・インホワ・ルー**

「ヨコハマトリエンナーレ2023」開催概要

アーティスティック・ディレクター
リウ・ディン（刘鼎）［アーティスト、キュレーター］
キャロル・インホワ・ルー（盧迎華）
［美術史家、キュレーター／北京インサイドアウト美術館 ディレクター］

会期　**2023年12月9日（土）～2024年3月10日（日）約80日間**

会場　**横浜美術館（横浜市西区みなとみらい3-4-1）**
プロット48（横浜市西区みなとみらい4-3-1）　ほか
※横浜美術館は大規模改修工事に伴い休館中。
「ヨコハマトリエンナーレ2023」でリニューアルオープンします。

主催　**横浜市、（公財）横浜市芸術文化振興財団、NHK、朝日新聞社、横浜トリエンナーレ組織委員会**

横浜美術館　撮影：笠木靖之

プロット48　撮影：加藤 甫

※事業名称は「横浜トリエンナーレ」（横浜：漢字）、各開催年の展覧会名称は「ヨコハマトリエンナーレ」（ヨコハマ：カタカナ）と表記しています。

アーティスティック・ディレクターについて

リウ・ディン（刘鼎）

アーティスト、キュレーター。
1976年、江蘇省常州市生まれ、北京を拠点に活動。中国の近現代史における文化、芸術、政治の影響関係に関するリサーチをもとに、テキストや写真、インスタレーション、絵画、パフォーマンスなど様々なメディアによる作品制作のほか、執筆活動や、展覧会企画を行う。主な個展に「Reef: A prequel」（ボンネファンテン、マーストリヒト、2015年）。主な国際展出品に、釜山ビエンナーレ（2018年）、イスタンブール・ビエンナーレ（2015年）、ヴェネチア・ビエンナーレ中国館（2009年）。主なグループ展に「Discordant Harmony」（アート・ソンジェ・センター、ソウル、他巡回、2015-16年）。またテート（ロンドン）のオンライン・フェスティヴァル「BMW Performance Room 2015」などに参加。

キャロル・インホワ・ルー（盧迎華）

美術史家、キュレーター。北京インサイドアウト美術館ディレクター。
1977年、広東省潮州市生まれ、北京を拠点に活動。北京インサイドアウト美術館での主な展覧会企画に「Wang Youshen: Codes of Culture」（2022年）。2012-15年、OCAT（深圳）アーティスティック・ディレクター兼チーフ・キュレーター。光州ビエンナーレ（2012年）コ・アーティスティック・ディレクター。『Frieze』への寄稿のほか、審査員として「Tokyo Contemporary Art Award」（2019-22年）、「Hugo Boss Asia」（2019年）、「ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞」（2011年）などを歴任。2013年、テート・リサーチ・センターのアジア太平洋フェローシップ・プログラム客員研究員。

リウ・ディン

キャロル・インホワ・ルー

共同キュレーションの実績

2007年より北京を拠点に共同でキュレーションを開始。
近年の主な展覧会企画に「Notes: Chinese Artistic and Intellectual Voices from the End of the Twentieth Century」北京、2022年、トランス東南アジア・トリエンナーレ「Sounds as Silence: The Academic Value of Life」広州、2021年、安仁ビエンナーレ「Crossroads」安仁、2017年、深圳彫刻ビエンナーレ「Accidental Message: Art Is Not A System, Not A World」 OCAT、深圳、2015年、「Little Movements: Self-practice in Contemporary Art」第1回：OCAT、深圳、2011年／第2回：ムセイオン、ボルツァーノ、2013年／第3回：国立アジア文化殿堂、光州、2015年。

アーティスティック・ディレクターの選考にあたって

浅田 彰　第８回横浜トリエンナーレ　アーティスティック・ディレクター選考委員会 委員長
京都芸術大学 教授、ICA京都 所長

第８回横浜トリエンナーレのアーティスティック・ディレクター選考にあたっては、書類選考を踏まえて３組の候補者のリモート面接が行なわれ、リウ・ディン（刘鼎）とキャロル・インホワ・ルー（盧迎華）のチームが選ばれました。第７回横浜トリエンナーレのラクス・メディア・コレクティヴに続き、外国人の男女混成チームがアーティスティック・ディレクターを務めることになります。ちなみに、選考委員会も女性３名と男性２名、しかも今回初めて外国人２名（横浜と同じ港町のリヨンとイスタンブールから一人ずつ）を迎えた構成で、パンデミックの影響もあってリモート形式だったため世界各地をつないで二度にわたる充実した審議ができました。とはいえ、私たちはポリティカル・コレクトネスだけで日本以外のアジア地域の人なり女性なりを優先しようと考えたわけではなく、あくまでも芸術的かつ社会的に意義深いトリエンナーレを実現するヴィジョンと実行力があるかという点を最も重視して選考にあたったことを強調しておきます。

世界のアート・シーンの第一線で活躍する候補が揃っただけに、最終選考はたいへん水準の高いものでした。とくに、リウ・ディンとキャロル・インホワ・ルーの提案は、世界各地のアート・フェスティヴァルでよく見る流行のテーマを並べるのではなく、日本でも馴染み深い魯迅の『野草』という散文詩集から出発して深く広く想像力を巡らそうとするもので、アジアに開かれた都市・横浜でのアート・フェスティヴァルにふさわしいものと思われました。このアーティスト／キュレーター・チームは、すでに日本を含む世界各地での制作・展示やアート・フェスティヴァルの組織などの経験を重ねて、状況に柔軟に対応しながら企画を実現していく能力を備えており、ポストコロナ時代に入って対面形式を含むコミュニケーションの可能性が広がっていけば、詩的なテーマを具体化して興味深いトリエンナーレを実現することができるでしょう。選考委員会が最終的にリウ・ディンとキャロル・インホワ・ルーを選んだのは、このような理由によるものです。

ニコラ・ブリオーは「ラディカント」（蔦のように茎や葉から不定根を出して広がっていく植物）をグローバル化したアート・ワールドのパラダイムとして提案しました。前回の第７回横浜トリエンナーレ アーティスティック・ディレクター選考結果報告でも述べたことをそれに添って新たに言い換えるなら、『野草』を出発点とする想像力の冒険があちこちの隙間に根を下ろしながら赤レンガを覆う蔦のように広がってゆき、表面的なグローバリズムを超えた真に国際的なアート・フェスティヴァルに結実することを期待してやみません。

第８回横浜トリエンナーレ　アーティスティック・ディレクター選考委員会 委員　※敬称略

浅田 彰（委員長）	京都芸術大学 教授、ICA京都 所長
蔵屋美香	横浜トリエンナーレ組織委員会 総合ディレクター、横浜美術館 館長
鷲田めるろ	十和田市現代美術館 館長
ビゲ・オール	イスタンブール・ビエンナーレ ディレクター
イザベル・ベルトロッティ	リヨン現代美術館 館長、リヨン・ビエンナーレ ディレクター

新たな「みなとの祝祭」を、世界に届ける

蔵屋美香
横浜トリエンナーレ組織委員会
総合ディレクター
横浜美術館 館長

今から21年前、横浜トリエンナーレは、タイトルに「メガ・ウェイブ」をうたい、「市民に開放された巨大な祝祭」とのコンセプトを掲げて出発しました。以来横浜トリエンナーレは、一言でいうなら、波が打ち寄せる「みなと」で行われる人々の「祝祭」を長くその理念としてきたのです。20年の節目を過ぎたいま、横浜トリエンナーレは、あらためて「みなと」と「祝祭」の意味を捉えなおし、更新したいと考えます。

人と人との豊かな出会いをもたらすと同時に、異質なものとの衝突をはらむ「みなと」。共感の輪を広げる可能性と、集団的な熱狂のあやうさをあわせ持つ「祝祭」。

グローバリゼーションが進展し、友情と共に争いが生まれる今日の世界に、わたしたちは、どのような新しい「みなとの祝祭」からのメッセージを届けることができるでしょうか。

第８回展も、前回に引き続き海外よりアーティスティック・ディレクターを迎え、アートを通じた世界との対話を続けて行きます。

＜参考資料＞

● **2014年世界の国際展トップ20にランクイン**

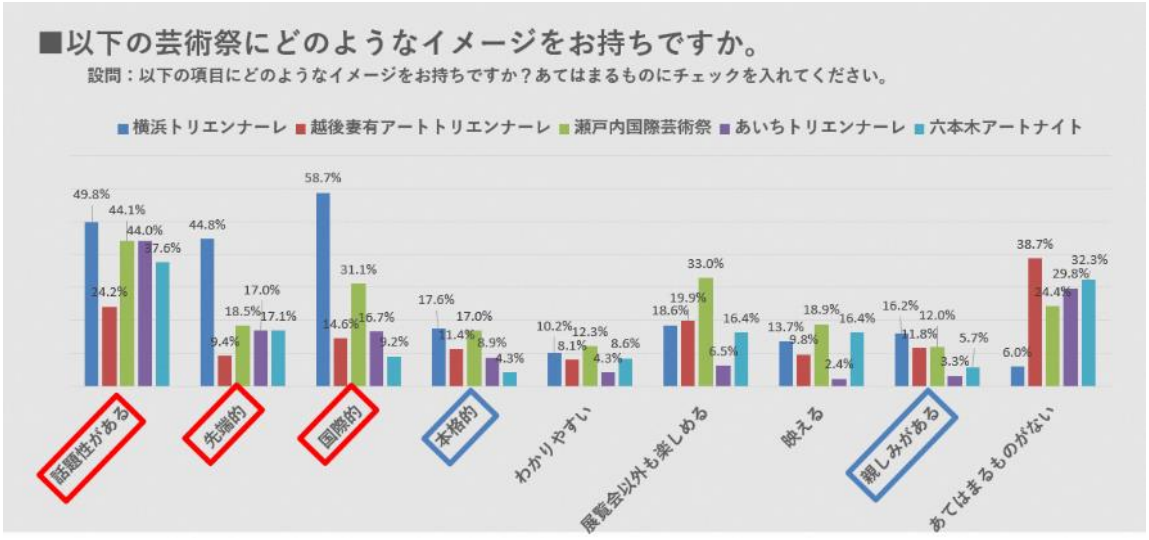
artnet news（2014年5月19日）「World's Top 20 Biennials, Triennials, and Miscellennials （世界のビエンナーレ・トリエンナーレTOP20）」において、日本で唯一 17位にランクイン　掲載記事はこちら

● **2020年注目の国際展トップ20にランクイン**

artnet news（2020年1月3日）「Here Are 20 of the Most Anticipated Biennials and Triennials Around the World in 2020, From Taipei to Helsinki（2020年世界で最も期待されるビエンナーレ･トリエンナーレTOP20：台北からヘルシンキまで）」「横浜はアーティスティック・ディレクターに『コレクティヴ（複数人で活動するキュレーター・チーム）』を選んでトレンドに乗った」と紹介　掲載記事はこちら

● **「ヨコハマトリエンナーレ2020」来場者のイメージ「国際的」「先端的」が上位ランクイン**

※「ヨコハマトリエンナーレ2020」来場者アンケートより（n=2188）



横浜トリエンナーレとは

横浜トリエンナーレは、横浜市で３年に一度開催する現代アートの国際展です。これまで、国際的に活躍するアーティストや新進のアーティストを広く紹介し、世界最新の現代アートの動向を提示する場となることを目指してきました。
2001年に第１回展を開催して以来回を重ね、世界の情勢が目まぐるしく変化する時代の中で、世界と日本、社会と個人の関係を見つめ、アートの社会的な存在意義をより多角的な視点で問い直してきました。また、過去には、東日本大震災直後の第４回展（2011年）、新型コロナウイルス感染症拡大のなか開催した第７回展（2020年）のように、未曽有の事態に直面した社会の変化を受け止め、アーティスト達と共にそこに向き合ってきました。

第１回展（2001年）から第３回展（2008年）までは独立行政法人国際交流基金が主催団体のひとつとして事務局機能を担い、現代アートを通じて日本と各国との文化交流を促すことを目的に事業を実施してきました。第４回展（2011年）以降、運営の主体を横浜市に移した後も、文化庁の支援を受けたナショナルプロジェクトとして、同時に文化芸術創造都市・横浜を象徴するプロジェクトとして継続開催し、多数の来場者を迎えています。

過去の開催履歴

第１回　横浜トリエンナーレ2001　メガ・ウェイブ―新たな総合に向けて
第２回　横浜トリエンナーレ2005　アートサーカス [日常からの跳躍]
第３回　横浜トリエンナーレ2008　TIME CREVASSE ―タイムクレヴァス―
第４回　ヨコハマトリエンナーレ2011　OUR MAGIC HOUR　―世界はどこまで知ることができるか？―
第５回　ヨコハマトリエンナーレ2014　華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある
第６回　ヨコハマトリエンナーレ2017　島と星座とガラパゴス
第７回　ヨコハマトリエンナーレ2020　AFTERGLOW―光の破片をつかまえる

第１回　横浜トリエンナーレ2001
椿昇＋室井尚《インセクト・ワールド、飛蝗》2001年　撮影：黒川未来夫

第４回　ヨコハマトリエンナーレ2011
ウーゴ・ロンディノーネ《月の出、東》2005年
協力：the artist and Galerie Eva Presenhuber, Zürich
©the artist　撮影：木奥恵三

第７回　ヨコハマトリエンナーレ2020
ニック・ケイヴ《回転する森》2016年（2020年再制作）
©Nick Cave　撮影：大塚敬太

お問い合わせ　横浜トリエンナーレ組織委員会事務局　広報担当：山本
E-MAIL：press@yokohamatriennale.jp　TEL：045-663-7232（平日10:00～18:00）
プレス画像貸出のご希望はこちらからご連絡ください